



Original Story アトリエかぐや
[Berkshire Yorkshire]

Novelization 藤山恵司

Original Illustration Chocochip

プロローグ

5

第1章 幼なじみ大集合！

13

第2章 プールでヒヤヒヤ

43

第3章 女子トイレでハラハラ

81

第4章 ばじゃまでドキドキ

123

第5章 みんなでラブラブ

161

エピローグ

204

プロローグ

無限に続く白。

一面を霧に覆われたような空間が広がっている。見通しは悪く、自分がどこに佇たたずんでいるのかも定かではなかった。

しかし、不思議なことに不安は感じない。むしろ、懐かしさにも似た想いが胸を満たしている。

「そうすけ 莊介え！」

霧の向こう側から、小さな女の子が、俺のもとにトテトテと走ってくる。

（あれ……この子、誰だっけ？）

その子が目の前に来たあたりで、俺は妙なことに気づいた。身長に大きな差があるはずの彼女と俺の目線が、まるで同じなのだ。

（ああ、なるほど……俺も子供なんだ）

よくよく自分の姿を見てみれば、今の俺は彼女と同じくらいの子供の姿をしていた。

「莊介くん」

別の女の子が控えめに俺の手を引く。どこことなく、育ちの良さが感じられる子だった。

もやもや
もやもや
もやもや

「ハァイ、莊介！」

今度は、金髪の女の子が、思いっきり俺の背におぶさってきた。元気というか、かなりやんちゃな娘さんである。

「莊介、あそぼ！」

目の前にいる子がニコリと微笑んだ。この快活な笑みを……俺は知っている。俺は感覚的に、彼女が誰かを察した。

「おまえ、あすかか？」

「うん、そうだよ」

目の前の子は、紛れもなく子供の頃の幼なじみの姿だった。

（そうだ。ほかの子たちもどこかで……）

記憶にかかった霽はらが、次第に晴れていく。

『……………すけ……………そう……………』

もう少しで、あのお嬢さまっぽい娘と、金髪の元気娘のことを思い出しそうだ。

『……………そうすけ……………莊介……………』

どこかで俺を呼ぶ声がある。もう少しだっていうのに――。

「うるさいな……」

「うるさいって、何だあ……!!」

ドボォー！

もやもや
もやもや
もやもや

鬼のような形相になった子供の頃の幼なじみが、いきなり俺のみぞおちに痛烈なボディブローを叩き込んだ。

☆ ☆ ☆

「ぷほあっ!!」

痛みよりも、驚きの方が先に立ち、俺は何事かと跳ね起きる。

「あ、起きた」

そして、学園の可愛らしいセーラー服を着た幼なじみと目が合う。彼女はどうか控えめに解釈してあげても、俺に二撃目の拳を打ち込もうとしているようにしか見えなかった。

「……あすか、なにしてんだ?」

「なにつて……正拳突き?」

「幼なじみを正拳突きで起こす娘さんが、どこの世界にいるんだあ〜〜!?」

「ん〜、ここ?」

あっさりと自分を指差しやる。

「そっちこそ、せつかく起こしに来てあげた可愛い幼なじみに『うるさい』ってなによ? 失

礼しちゃうわね」

ちゃっかりと、自分を『可愛い幼なじみ』と言い切る彼女は、お隣さんの涼風あすか^{すずかぜ}。俺

とは幼なじみの間柄で、小学校からつき合いのある腐れ縁だ。

俺とあすかの家とは、ふたりが同じ病院で生まれて以来、家族ぐるみで親交がある。幼稚



園と、小学校の低学年の頃、親父の転勤でこの町を離れていた時期を除き、俺とあすかのつき合いは途絶えたことがない。

世話焼きで、毎朝のように俺を起こしに来てくれるのはありがたいが、微妙に加減を知らないところが困りものだ。

「……なんか知らんが悪かった。頼むから、明日からはごく普通に起こしてくれ」

あすかに『うるさい』と言った覚えはないが、とりあえず俺は謝っておくことにする。変にヘソを曲げられ、起こしに来てもらえなくなったら、それはそれで大惨事なのだ。

「うむ、素直でよろしい」

両の腰に手を当て、あすかは満足げな笑みを見せる。

「……しっかし、あの夢の続き……無茶苦茶、気になるな……」

「へえ、夢なんか見てたんだ？　どんな夢？」

「それは——」

答えかけて俺は硬直してしまう。

「あすかに殴られる夢？」

「殴ったのはリアル。あんた、まだ寝ぼけてるの？」

ふうとため息を吐いて呆れるあすか。俺はポリポリと頭を搔く。

（俺……どんな夢を見てたんだっけ？　何か大切なことを思い出しかけたような……？）

俺は、さっきまで見ていたはずの夢をすっかり忘れていた。まあ、夢とは得てしてそんな



ものかもしれないのだが。

「朝ごはんの用意は、もうできてるから。急がないと遅刻しちゃうわよ」
訝しげに首を捻る俺を置いて、あすかはパタパタと一階に下りていく。時計に視線を送れば、時間はもうわりとヤバげな頃合いになっていた。

☆ ☆ ☆

「あれ？ 親父たちの旅行って今日からだっけ？」

「そうよ。今更、なに言ってるんの、あんたは……」

歩き慣れた通学路を歩きながら、あすかは呆れたように息を吐き出す。

「詳しい日程は聞いてなかったんだよ。うちの親父のそういうアバウトなところ、あすかも知ってるだろ？」

「あはっ、まあね」

いかにもうちの親父らしい、といったふうにあすかは苦笑する。実際、そんな親父の性格のせいで、俺が迷惑を被ったのは一度や二度じゃ済まないわけだが。

「それにしても、子供を置いてそろって旅行とは……どんだけ仲がいいんだか」

実はこの旅行、うちの両親とあすかの両親が、親睦を深めるためのものだ。そのため、私たちの旅行中、両家は子供だけになってしまふ。まあ、俺も両親にそれなりに信用されてるから、平気で留守も任されるわけで……。

「あ、そうそう。あんたの生活費も、おばさんから預かってるから」



……前言撤回。まったく、信用されてないわ、俺。そりゃないぜ、母さん。

「よっ！ ふたりとも、おはようさん！ ……って、朝っぱらから、何へこんでるんだ、莊介は？」

「うっす、浅野^{あさの}。多感なお年頃なんだ、ほっとけ」

「難儀なもんだ。なあ、あすかちゃん？」

「保護者として心配だわ。育て方に問題があったのかしら」

□々に勝手なことを言いやがる浅野とあすか。

「悩みごとがあつたら、いつでも相談してくれ。俺たち、短いつき合いじゃないだろ？ で、金を貸してくれてるのは、勘弁な」

「うわあい。ニヤケ面で言われても嬉しくねえぞ、この野郎」

この調子が良さそうなのは、浅野康晴^{やすはる}。俺とは小学校からのつき合いで、一緒に色々とバカをやらかしてきた悪友である。黙っていれば二枚目系。口を開いて三枚目。話し込めば問題外の困ったちゃんだが、不思議と俺とは気が合うようだ。

「それよりさ、おまえ知ってるか？」

「……何をだよ？」

「ああ、無知とは罪！ 無知とは残酷！ 神よ、なぜ後藤^{ごとう}莊介に知を与えなかった!？」

芝居がかった口調で言い放ち、浅野はくにかくにやと身悶えする。気持ち悪いこと、この上なかった。



「うわ、今日はいつも増してテンション高いわねえ」

「そっか？ いつもこんなモンだ」

微妙に引き気味だったりする、あすかと俺。つか、通勤中のサラリーマンが、何事かところちを振り向いてる。朝から不気味なモノを見せてスイマセン。

「さっさと教えろ。ご町内に迷惑だ」

「ならば教えよう！ 今日、うちのクラスに転入生が来るんだよ！」

「転入生？ こんな時季に？」

あすかが疑問に思うのも当然だ。今は六月の半ば。転入生が来るにしては、少し時期外れだろう。

「ん〜、でも、そういうこともあるぞ。俺の時もそんな感じだったような気もするし」

「へえ、そうなんだ？」

俺が転入したのは、随分と昔の話だが、わりと時季外れだった印象は残っている。

「きつと、転入生は可愛い女の子だぜ！」

「そりゃ、おまえの願望だろうが」

転入生だからといって、妙な期待をかけられては、相手の方がたまったものではない。

「いいや、違うな！ 俺の第六感が、今日は運命の出会いがあると告げているんだ！」

「はいはい」

「あつ、その生暖かい目はなんだ？ まったく、信じてないな!？」



「電波発言のなにをどう信じろつてのよ……」

俺もあすかの意見に激しく同意だった。

「じゃ、早く学校に行って転入生が可愛い女の子かどうか確かめようぜ！ 負けた方は、今日の昼メシおごりな！」

「いいよ、なんでも。おまえの気が済むようにしてくれ………ん？ いや、『早く』学校に行くのは不可能だな」

何気なく腕時計に視線を落とした俺は、非常に重要な事実に気づいた。

「はあ、なんでだよ？」

「今、俺の時計はレッドゾーンに突入してるからだ。走らなきゃ、ホームルームに間に合わないな、これは」

「落ち着いていうことか……!? まったく、バカ野のバカ話のせいなんだからね！」

「え？ 俺のせいっすか？」

「そうだ！ 浅野のせいだ！ 空が青いのも、雲が白いのもすべて！」

俺たちは、校門に向かって全力で駆け出す。爽やかな朝が、これで台無しになったことはいうまでもない。

